

「わたしにとっては、あなたがたから裁かれようと、人間の法廷で裁かれようと、少しも問題ではありません」（3節）とパウロは語りました。私たちは、往々にして人からどう見られているか、どう言われているかということに恐れて行動しています。自分はどうしたいと思っても、人の目や言葉によって曲げざるを得なくなることもあります。とすると、パウロのように、世間からどう裁かれようと問題ではないという強い意志を持てることは魅力的に映ります。しかし一方で、誰の裁きも問題とせずに行動することは、独り善がりになり、多くの人を傷つけてしまうことも少なくありません。実は、パウロもかつてはそうでした。教会を「迫害し、男女を問わず縛り上げて獄に投じ、殺すことさえしていた」（使徒言行録22:4）と自ら告白しています。しかもそのようなことを行う自分は、当時の世の流れや価値観に照らして正しいと確信できたので、誰から何と裁かれようが少しも問題ではなかったのです。だとすれば3節の言葉は、魅力的であると同時に恐ろしい言葉でもあります。

しかしパウロは、今や「自分で自分を裁くことすらしません」と語ります。これは自分を断罪することだけでなく、自分を無罪とみなすジャッジもしないということです。その意味するところについて彼は、「自分には何もやましいところはないが、それでわたしが義とされているわけではありません。わたしを裁くのは主なのです」（4節）と説明しています。普通、自分の良心に照らして何もやましいところがなければ、「わたしは正しい」という主張になるものですが、パウロから言わせれば、自分の「良心」自体が疑うべき、不確かなものです。そして何より、神から見れば、自分は自分自身も相手も正当に裁けるだけの正しい人間ではないとするのです。このような感覚が持てるのは、信仰者の醍醐味です。

誰かを断罪してやろうという前提に立つとき、私たちの心の目は「誰がいかに悪いのか」に集中します。しかし、自分は神ではないのだから「先走って、何も裁いてはならない」（5節）という前提に立つ時、私たちの心は感情に流されていくことに対して「ちょっと待った」をかけ、「神様、なぜですか」と問い、聖書に証された神の思いに聞こうとする方へと促されていきます。それは自分自身の良心に従うからではありません。主イエスをこそ、我が良心とするからです。そして、それは私たちが思いもつかなかった第3の道、「神の秘められた計画」（1節）へと招かれようとするところでもあるのです。

（文責：望月達朗牧師）

